

## 芳流閣の決闘

八犬士の一人である犬塚信乃は、亡父の遺言に従って、父の形見の名刀村雨丸を澁我成氏に献上しようとするが、刀を偽物とすり替えられ、澁我城で敵の間諜（スパイ）と疑われて窮地に陥る。

いにしへの人言はずや、禍福はあざなふ繩のごとし、人間万事往くとして、塞翁が馬ならぬはなし。そは福の寄る所、はた禍の伏する所、かれにあればこれにあり、とは思へどもかねてよ、誰かよくその極みを知らん。

憐れむべし、犬塚信乃は、親の遺言、形見の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうちに年を経て、得がたき時を得てしかば、はるばる澁河へもたらして、名を揚げ、家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刃は元のものならで、わが身をつんざく仇とぞなりし、憾みをここに積くよしもなく、こと急にして意外にあり。僅かに当座の辱めを、避けばやと思ふばかりに、あまたの囲みを切り開きて、芳流閣の屋の上に、よじ登れどもとにかくに、逃れ去るべき道のなければ、そこに必死を究めたる、心の中はいかなりけん、想像るだにいと痛まし。

さればまた、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月ごろ獄舎につながれし、禍は今恩赦の福、わが縛めの縄解けて、人にぞかかる捕り手の役義、犬塚信乃をからめよとて、なまじひに選み出だされつ。他の憂ひを身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、否みて許さるべくもあらぬ、君命重くいや高き、かの楼閣は三層なり。その二層なる軒の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足もと遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸しの、炎熱をわたる敷き瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔々たる、ここ生き死にの海に入る、流れは名に負ふ坂東太郎。水際の小舟楫を絶えて、進退既に窮まりし、敵にしあればいかで我、つなぎ止めんとむささびの、樹伝ふごとくさらさらと、登り果てたる三層の、屋根には目柴差すよしもなく、互に隙をうかがひつつ、にらまへ合ふて立つたる形勢、浮図の上なる鶴の巢を、巨蛇のねらふに似たりけり。

【口語訳】

古人も言っていることだが、不幸と幸福とはない合わせる縄のようなもので表裏をなし、（また）人間の世のことは何事も「塞翁が馬」の故事のようでないものではなく、幸不幸は転変していくものである。それ（人間の世）は幸福が寄りかかっている所だし、また不幸が隠れている所であっても、あちらに（幸福が）あればこちらに（不幸が）ある、などとは思ってはみるが、一体誰があらかじめ幸不幸の転変する果てを知るだろうか、いや誰にもわからない。

かわいそうに、犬塚信乃は、親の遺言を心に刻み、形見の名刀を身に離さず、艱難辛苦の中で年月を過し、（ようやく）得がたい好機を得たので、はるばる澁河へ（その名刀を）持参し、名をあげ、家名を復興することができはざったが、その幸福は（たちまち）不幸へとすり替わってしまった。すり替えられていた村雨丸の刃は元のものではなくて、（疑われて）自らの身をつんざいて命を奪う原因となってしまう、（無実の罪を着ることになった）無念さを釈明する道もなく、事態は急転して思いがけないことになってしまう。せめてこの場でとらわれる屈辱を、（何とか）避けたいと思う一心で、多くの兵による囲みを切り開いて、芳流閣の屋根の上に、よじ登ってはみたが、いずれにしても脱出できる道がないので、そこで死ぬしかない状況に追い詰められた、その心中はどうであつただろうか、想像するのさえ痛ましい限りである。

さてまた、犬飼見八信道は、犯した罪があるわけでもなく、数ヶ月の間牢につながれていたが、その不幸は今恩赦という幸福に転じ、自らの縛めの縄はほどけて、人に縄をかけるという捕り手の役目（を与えられて）、犬塚信乃をからめ捕れと、むりやりに選り出されてしまった。他人の苦しみを自分の面目として、今さら用いられるようなことは、願わしくないと思うが、断つて許されるはずもない、主君の命令は重く高いもの、犬塚信乃がいる芳流閣もたいそう高く、三層の楼閣である。その二層の軒の上まで、我が身も霞むほどの高さに身を隠すようにして登って見ると、地上は遠く雲は近く、照る日差しは激しく堪えがたいほどで、時節は六月二十一日、昨日も今日も炎天続きの、すっかり熱せられた敷き瓦は、うねるように続いて隙間ない波に似ていて、下には大河が滔々と流れていて、ここが生きるか死ぬかの境で大河はやがて海に注ぐ。その流れは有名な坂東太郎（利根川）である。（相手の犬塚信乃は、）水際に楫を失った小舟のように、進退既に窮まった、そのような敵なのだから、何とかして自分が捕らえてやろうと、（見八は）むささびが木々を伝うようにさらさらと、三層の屋根に登り着いたが、そこには身を隠す手段もなく、（信乃と見八は）互いに相手の隙をうかがいながら、にらみ合って立っている様子は、塔の上にあるこうのとりのお巣を、大蛇が狙っているのに似ていたことだよ。